

# 日本社会福祉教育学会

## NEWS LETTER NO. 12

Japanese Society of Social Welfare Education

事務局 〒324-8501 栃木県大田原市北金丸 2600-1 国際医療福祉大学 小嶋研究室気付

TEL 0287-24-3067 E-mail [jsswe.bu@gmail.com](mailto:jsswe.bu@gmail.com) <http://kenkyuukai.jp/about/>

2012年1月31日発行

### 1. 巻頭言

#### 新年のご挨拶

会長 川廷 宗之

2011年の日本や世界での様々な事象から考えることは、官僚も政治家も企業幹部も、(そして私たちも)いかに成り行き任せでその場しのぎの対応を繰り返してきたかということがはっきりしたということでしょう。そして、その結果が如何に重大な問題を後世に残すかということが明らかになったことだと思います。別な意味では、皆が(自己保身につながりやすい)自分の考えのみで、やるべきと考えた事(やりたい事)ばかりをしていて、今、何をしなければならぬのか(何が必要とされているのか)を、問うて来なかった(問うてもやらなかった)結果がはっきり出たなと思います。

私個人としては、社会福祉業界も高等教育業界も、極端な少子化や学力低下(学習意欲の喪失)、クライアントへの共感が少ない社会福祉職員の出現などなど、様々な問題を引き起こしているにもかかわらず、極言すれば、その問題には直接的にはなるべく触れないようにしている現状もあり、これらの問題の枠外ではないと考えています。その意味では、改めて、社会福祉(専門職養成)教育のあり方について、基本から考えなおしていくことが必要ではないかと思えます。

それらを考えた「福祉教育のヴィジョン」を、今こそ、創り直していくことが必要なのでしょうし、その根拠となるべき研究をしっかりと積み重ねることが、必要なのだろうと考えます。とかく、研究は狭い領域の、一般の人々から見れば極めて特殊な内容になりがちです。私たちも、福祉教育というかなり専門的な領域に関する研究を主な目的としています。しかし、同時に福祉教育はその背後に広がる福祉や教育の広いすそ野を持つ研究でもありますし、その裾野への配慮のない研究は、社会的な有効性を持ちにくいのではないかと考えます。色々な研究があり得るでしょうが、それらの研究自体が社会的行為である以上は、その研究が持つ社会的意義への配慮は欠かせないでしょう。(2ページへ続く)

#### 目 次

1. 巻頭言・新年を迎えて	1
2. 学会探訪～大学教育学会	2
3. 宿題研究「職業人養成教育としての実習教育の課題」の進捗状況	3
4. 第2回春季研究集会の開催について	5
5. 2012年度・第8回大会(第1報)	6
6. 新カリに関する意識調査の結果(第1報)	7
7. プロローグ・私の福祉教育	7
8. 『日本社会福祉教育学会誌』第6号の発刊並びに第7号への投稿募集	10
9. 編集後記	10

特に近年の福祉教育もその枠外ではない教育問題や福祉問題は、現代日本の社会的矛盾が集約しているとも言え、その意味で、社会福祉教育研究の内容と質が問われていると言えるでしょう。そして当然のことながら、「学会」も一つの社会的機関として、どう社会貢献をしていくのか、その内容と質もまた問われていると思います。

2012年が、その様な意味で新たな展開をはじめた年として、多くの人々に記憶されるようになる事を祈りつつ、また、会員の皆様のご健勝と発展を祈りつつ……。また、春季研究集会や大会でぜひお会いして、意見を戦わせる日を楽しみに……。

## 2. 学会探訪～大学教育に関する専門学会の先駆け—大学教育学会

志水 幸 (北海道医療大学)

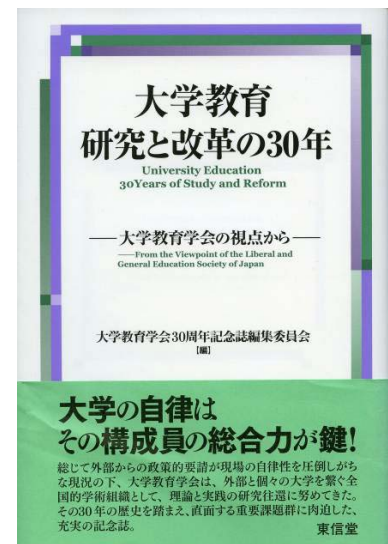
筆者は、以前から大学教育学会の個人会員で、2006年から2009年まで学会事務局幹事として、また現在も学会誌編集委員会委員として活動に参画している。そのような立場から、学会探訪の第1回の執筆を担当させていただいた。

さて、わが国の高等教育に関する代表的な学会としては、日本高等教育学会(1997年設立)、日本リメディアル教育学会(2005年設立)、初年次教育学会(2008年)、高等教育質保証学会(2010年)等があげられる。さらに、専門職養成教育に関する学会としては、日本医学教育学会(1969年設立)、日本看護教育学会(1991年設立)、日本介護福祉教育学会(1994年設立)日本保健医療福祉連携教育学会(2008年設立)等があげられる。

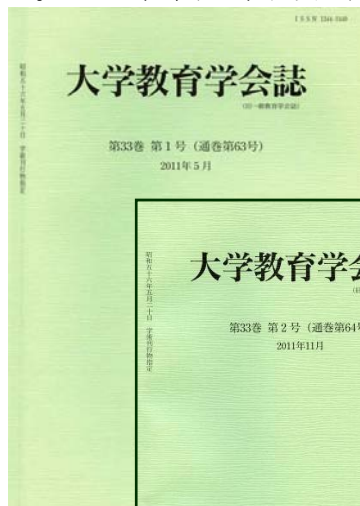
大学教育学会は、1979年12月に296名の会員によって「一般教育学会」という名称のもとに設立された。当時は、わが国で唯一の大学教育に関する専門学会であった。1999年には「大学教育学会」に改称し、2011年9月30日現在で個人会員1,186人、団体会員235校・団体、第8条会誌会員(官庁、学校、図書館、学会その他の団体の学会誌購入会員)376団体を数える規模にまで発展している。この間の大学教育学会の歴史や高等教育改革の概要については、『新しい教養教育をめざして - 大学教育学会25年の歩み: 未来への提言』(東信堂、2004年)や『大学教育 - 研究と改革の30年: 大学教育学会の視点から』(東信堂、2010年)に詳述されている。ぜひ、ご一読いただきたい。

学会活動の中心は、春に開催される学会大会、秋に開催される課題研究集会、年間2回発行される大学教育学会誌および支部活動である。学会大会は、シンポジウム、ラウンドテーブル、自由研究報告で構成されている。また、学会として取り組む研究テーマを課題研究として設定し、その推進のために研究委員会を組織(会員からの応募→学会による審議・承認→研究費の分配)し、研究成果を共有するために学会大会や課題研究集会でシンポジウムの場を提供している。とりわけ、わが国の高等教育政策において、学会による研究成果をもとに、ファカルティ・ディベロップメント(以下、FD)や初年次教育に関する議論を主導してきた学会として特筆されよう。

ここで、直近5年間の学会大会・課題研究集会のテーマを紹介しよう。学会大会の総合テーマは、「持続可能な社会と大学」(2007年)、「大学の『教育力』」(2008年)、「教育者としての大学教員」(2009年)「大学の存在意義(レゾンデートル)」(2010年)、「大学教育の質とは何か—ふたたび大学のレゾンデートルを問う」(2011年)であった。また、課題研究集会の統一テーマは、「学士課程教育の再考」(2007年)、「学生の主体的な学びを広げるために」(2008年)、「学士課程における教養教育再考」(2009年)、「キャリア形成における大学教育—ライフサイクルの視点から」(2010年)、「大学教育の原点—授業・学生・教養」(2011年)であった。



会員名簿をみれば、いわゆる教養教育担当教員が多くを占めているが、近年では社会福祉学や看護学等を専門とする個別研究分野の研究者や高等教育研究者、さらには大学職員（行政管理、教育支援、スタッフ・ディベロップメント(以下、SD)等との関連から)の入会が増えている。近年の大学教育学会における社会福祉教育関連の事項をみれば、2007年の第29回大会自由研究では、福祉系大学1年生を対象とする調査研究をもとに「授業に先立って学生へのアセスメントをどう行うか - 初年次教育とのかかわりの中で」(川廷宗之ほか)が報告されている。また、2008年11月号の『大学教育学会誌(第30巻2号:通巻58号)』では、事例研究として「大学における対人関係形成能力の教育に関する一考察 - 看護師・作業療法士・社会福祉士養成課程の実習教育における共通課題」(細川つや子、横山奈緒枝、難波悦子)が掲載されている。さらに、筆者も、何度か社会福祉教育の立場からラウンドテーブルを企画してきた。



2008年には「大学教育における社会福祉専門職養成教育の課題」、2010年には「保健医療福祉系大学における教養教育の問題 - 教養教育と専門教育とのつながり」、2011年には「保健医療福祉系大学における教養教育の問題(2) - 人文社会系教養の意義を考える」を開催した。殊に、過去2年間の連続企画は、医学、薬学、看護学、社会福祉学の専門学部教員と教養教育教員とのコラボレーションによって実施されたものである。

翻って、近年の高等教育機関が直面している問題は、高大連携のあり方や入口管理・出口管理、リメディアル教育と初年次教育、教養教育と専門教育の接合、授業開発や教育評価、FDやSD等々、じつに多様である。これらの問題について、どのように考えるべきか。大学教育学会は、一方で教育の外部環境の変化に的確に対応しつつ、他方では高等教育機関の矜持をもって教育の本質を探求し続ける学会であり、われわれの教育研究にとっても参考になることが多い。なお、学会のホームページは、<http://www.daigakukyoku-gakkai.org/>である。ぜひ、一度はご覧いただきたい。

### 3. 宿題研究「職業人養成教育としての実習教育の課題」の進捗状況

高橋信行(鹿児島国際大学)

宿題研究「職業人養成としての福祉教育の課題」は、2010年の理事会において、柿本誠(日本福祉大学)前学会理事先生と高橋の2人が中心になり、進めることになったが、実質的に立ち上がったのは、日本社会福祉教育学会の第1回目の春季研究集会(2011年3月6日)においてである。

#### 1. 第1回秋季研究集会の成果

第1回春季研究集会は、そのテーマ選択において、宿題研究との関係が深く、「社会福祉専門職養成教育における職業教育としての基盤をどう整えるか」として、基調講演とシンポジウムが行われた。内容は学会ニューズレターにおいて詳述しているが、当日基調講演(中央大学池田賢一先生)とシンポジウム(大妻女子大学井上俊也先生、立教大学橋本正明先生、北星学園大学米本秀仁先生)を振り返り、3つのポイントを示すことが出来た。一つは「生活構造の中の理解」としてくくったが、特にここでは、単に雇用側の要請に答えるというのではなく、社会生活する人間としての学び、社会参加、権力に立ち向かうということも含め、地域でさまざまな人と関係を結ぶ等を求めていくことを職業教育の中でとらえるとき、生活をしていくことという点が浮き彫りになる。

2つめは「社会福祉職業教育を学生の多様化に応じて多様化すること」についてである。

社会福祉教育を受けた学生の中には、以前から社会福祉以外の職場を目指すものがいた。「職業的専門性」の構成要素として「倫理」のもと「専門知識」と「専門技術」その基礎として「基礎知識」が設定され、この中に教養教育が含まれていた。キャリア支援教育や汎用的能力の育成は、大学教育の全体の中では行われるとしても、福祉専門職教育の中での多様化に意識したプログラムとして、ことさらに組み込む必要はないのではないかというのが、ここでの結論である。

3つめが「社会人基礎力等の汎用的能力と社会福祉専門職スキルー福祉専門職のスキルアップにキャリア教育は使えるか」という点である。シンポの中では、いわゆる社会人基礎力等の汎用的能力と社会福祉専門職スキルは重なっており、あえて福祉専門職教育以外で、キャリア教育は必要ないという意見もあった。しかし、到達点において、現行のプログラムの中でそれが達成できているとは言い難い側面があり、そこには、例えば、社会福祉士養成であれば、「相談援助実習」の前にある程度のスキルを身に付ける「準備段階」と相談援助実習後の「事後段階」における多様な体験プログラムを用意することも考えられる。それは、社会福祉士養成課程の中では、認められていないが、先駆的分野や今後その可能性がある分野、マネジメントやアドミニストレーションに関わるようなもの、である。

こうした段階を社会福祉専門職教育の中で行うのか、それともキャリア教育の中で行うべきかについては、まだ結論は出ないとするものであった。

## 2. 2011年学会シンポジウムⅠ「大学での社会福祉教育における職業人養成教育」での報告

特に先の3番目の点に関連して、2011年度の学会シンポジウムⅠ「大学での社会福祉教育における職業人養成教育」において、この論点を用意した。

まず、社会人基礎力等汎用性の能力で求められる項目と社会福祉士の相談演習や実習で求められる教育内容を比較した上で社会福祉専門教育は、方向性としては、「人間性がよければいい」と言う点から「高い専門性を持った人材養成」を目標として、あえて、社会人としての基礎的な力については、関心を寄せなくなっているように見える。こうした点から、社会福祉専門職教育が、社会人基礎力等のスキルをカバーした養成プログラムであるとは、必ずしも言えないと結論づけた。加えて、プレ実習としての意味をもつ、「ボランティア経験」にも言及した。

またこれからの宿題として、福祉教育は職業人としての福祉援助者像をどのように伝えているかという点にふれた。福祉専門職の資格取得教育が中心になってくるにつれて、学生の福祉援助像は、抽象的な社会福祉士やソーシャルワーカー像となっていないか。福祉現場のワーカーに自分のキャリアの話をしてもらおうと、学生は、「医療ソーシャルワーカー」、「老人ホームの生活相談員」、「社会福祉協議会の職員」、「地域包括支援センターの職員」等、現場のワーカーが次から次と転職を繰り返していることに驚く。(少なくともソーシャルワーカーということで筋は通っているものもあるが、そうでない場合もある) 抽象的なソーシャルワーカー像をもって現場にのぞんでも、「そんな人いません」ということになってしまわないか。我々は、どこにも存在しない「ソーシャルワーカー」を概念だけ伝えているのではまずい。学生は職業としての福祉職をどのように選択していくか、その問題があるが、この点は今後の宿題としていきたいと結んだ。

## 3. 現在の宿題研究のサブテーマ

宿題研究の参加メンバーから出された宿題研究のサブテーマは2つである。

1つは、埼玉県立大学寫末憲子氏を中心に行う「社会福祉士養成教育の実習を通じた現場と大学の協働実践による検討」であり、もう1つは、高橋が担当する「福祉学生の進路選択と就職」というものである。

前者のテーマは、社会福祉士養成課程における実習を通じた現場と大学の協働実践について、本学会の宿題研究の観点から整理するとともに、教育・実践に有用な知見を見出すものであり、後者のテーマは、学生がどのように進路選択をしていくのか、その中で相談援助実習や演習はどのような意味づけになっているのか。その上で、具体的に就職活動としてはどのような選択を行い、就職を決めていくのか、これらのプロセスを追うとともに、卒業生を対象にした調査(就職活動の実態と実習とのシークエンスと断絶について調査を行う。これらを通して、福祉学生への職業教育のあり方を考えるものである。

これら2つのサブテーマを中心に今年の活動は進められル予定である。



#### 4. 第2回 春季研究集会の開催について

テーマ：社会福祉教育研究の多様性と共通基盤をめぐって

日時：2012年3月5日(月) 10:30~16:00 [受付10:00より]

会場：大妻女子大学千代田キャンパス (〇〇棟〇〇階〇〇教室)

参加費：会員・一般2,000円(大学院生無料：但し学生証を持参すること)

主催：日本社会福祉教育学会・(社)日本社会福祉士養成校協会関東甲信越ブロック

##### 【趣旨】

この度の2011年役員改選により、新たに組織された第3期理事会では、学会設立の意義を継承しつつ、今後の研究の新機軸を模索するに相応しい内容の研究集会を企画いたしました。

第1部の基調講演では、今年度末に退職される米本秀仁先生(学会設立時の呼びかけ人・初代事務局長、前副会長)より、福祉系学会における教育研究を回顧しつつ、今後の専門職養成教育の課題について教育研究の観点からお話いただきます。

また、第2部のシンポジウムでは、社会福祉教育研究の多様性を俯瞰しつつ、その中核を焦点化することにより、社会福祉教育研究のフィールド(内包と外延)に関する共通理解の確立に向けた議論を深めたいと考えております。

社会福祉教育研究は、一方で専門職養成教育の理想と現実との狭間でおこる多様な要請に応えることが喫緊の課題であることは明白です。しかし、他方では教育の質保証やアカウンタビリティに資するべく、専門職養成教育のミニマム・スタンダードについての明確化、さらには共有化に向けた研究成果の蓄積が求められます。そこで、今回のシンポジウムでは、(社)日本社会福祉教育学校連盟社会福祉専門教育委員会作成の「コア・カリキュラム」を議論の軸として、多様な立場から意見を交換しつつ、専門職養成教育の標準化を志向する研究の端緒を開くことを目的とします。

##### 【内容】

10:30~10:35 開会の挨拶

10:35~10:40 趣旨説明

10:40~12:00 第1部基調講演「社会福祉教育研究の回顧と展望

- 福祉系学会における教育研究と専門職養成教育の課題 -

講演者：米本秀仁(北星学園大学)

コメンテーター：川廷宗之(大妻女子大学)

12:00~13:00 昼食

13:00~15:45 第2部シンポジウム「社会福祉教育研究の多様性と共通基盤をめぐって」

コーディネーター：志水 幸(北海道医療大学)

シンポジスト：「専門職養成教育の理想と現実」宮嶋 淳(中部学院大学)

「学部教育の到達水準とコア・カリキュラム」杉山克己(青森県立保健大学)

「専門職養成教育とコア・カリキュラム」白川 充(仙台白百合女子大学)

コメンテーター：米本秀仁(北星学園大学)

15:45~15:50 第8回大会のご案内

15:50~15:55 事務連絡

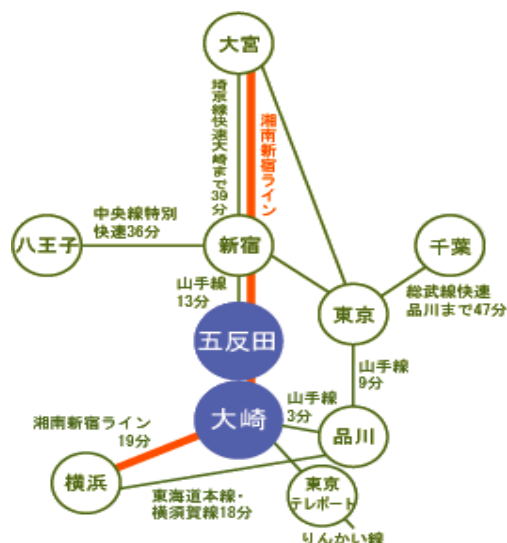
15:55~16:00 閉会の挨拶

## 5. 2012年度・第8回大会（第1報）

2012年8月25日、26日に立正大学大崎校舎にて、日本社会福祉教育学会第8回大会が開催されます。今回は、「社会福祉士養成課程の改正について検証する(1)－完成年次を迎えてどのように評価するのか－」をテーマに、現時点での新カリキュラムの評価を行う予定です。会員同士の情報交換の場も設けますので、多数のご出席をお待ちしております。

I. 日時：2012年8月25日(土)～8月26日(日)

II. 場所：立正大学大崎校舎（地図参照） 〒141-8602 東京都品川区大崎4-2-16



大崎駅、五反田駅から徒歩5分・大崎広小路駅から徒歩1分 大崎広小路駅（東急池上線）  
大崎駅（JR 山手線、埼京線、りんかい線） 五反田駅（JR 山手線、都営地下鉄浅草線）

### III. 大会スケジュール

日時	内容	詳細
<b>2012/8/25</b>		
9:00～12:00	ワークショップ	科目・演習・実習教授法に関する演習(希望者のみ参加)
12:30～13:00	一般参加者受付	
13:00～13:30	開会式	学会長挨拶・学会主催校挨拶
13:30～14:30	記念講演	「社会福祉士養成課程の改正についての科目外担当からの評価」(仮) (講師は調整中)
14:30～17:00	自由研究発表	1人につき発表20分・質疑応答10分
17:00～18:00	総会	
18:10～20:00	ランプセッション	会員への社会福祉士養成課程改正に関する調査報告を受けて、各学校の状況についての意見交換
<b>2012/8/26</b>		
9:00～10:00	基調講演	「社会福祉士養成課程改正についての経緯」(仮)白澤政和先生(桜美林大学)
10:00～12:40	シンポジウム	「社会福祉士養成課程の改正について検証する(1)－完成年次を迎えてどのように評価するのか－」(講師は調整中) ・社会福祉士科目の立場からの評価・実習演習教育の立場からの評価
12:40～13:00	閉会式	次年度開催校挨拶・閉会挨拶・閉会宣言

#### IV. 今後の予定

4月以降に参加申込み、自由研究発表申込みを受け付けます。参加費や手続き、大会スケジュールの詳細については、後日会員の皆様に郵送とホームページにてお知らせ致します。

なお、8月25日の午前中に会員主催のワークショップを予定しております。科目・演習・実習教授法のワークショップ(3時間)を実施希望の方は、下記までご連絡をお願いします。

また、大会についての問い合わせがある場合も、下記までお願いします。

第8回大会実行委員長 立正大学 保正友子(ほしょうともこ) [fukukyo@ris.ac.jp](mailto:fukukyo@ris.ac.jp)

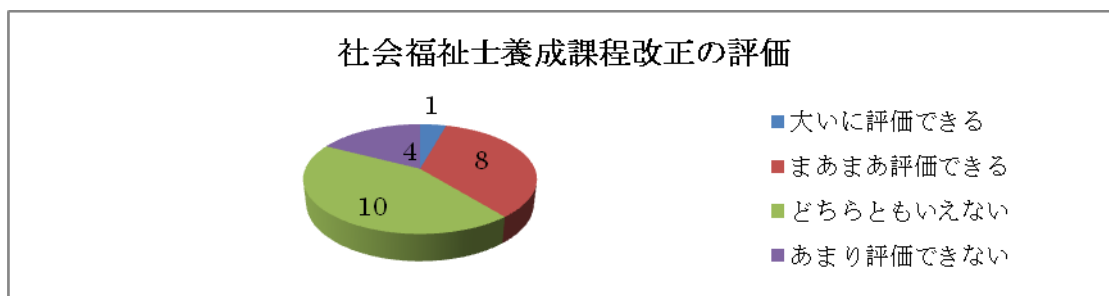
## 6. 新カリに関する意識調査の結果 (第1報)

保正友子 (立正大学)

第8回大会に向けて、日本社会福祉教育学会会員が所属する教育機関では、今回の社会福祉士カリキュラム改正によって具体的にどのような影響があったのかを明らかにし、今後の改革の方向性を検討する資料を得るために、全会員対象の郵送調査を実施しました。

アンケート調査回収時期は、2011年11月半ばから12月10日までの1ヶ月弱で、回収数は23通、回収率は10.6%でした。回収率自体は低いものの、会員が置かれている状況を把握するためには貴重な資料が得られましたので、調査結果の一部をご紹介します。

社会福祉士養成課程改正全体の評価については、「どちらともいえない」が10人、「まあまあ評価できる」が8人、「あまり評価できない」が4人、「大いに評価できる」が1人でした。



評価できる点聞いたところ、教育内容と教育方法が明確になったこと、実習・演習科目の充実が主でした。一方、評価できない点聞いたところ、教養教育の時間削減、利用者理解の弱さ、実習時間の短さ、教員の負担増等が挙げられました。

今回の調査結果の詳細については、学会誌及び第8回大会の配付資料として、今後公表する予定です。

## 7. プロローグ：私の福祉教育

宮嶋 淳 (中部学院大学)

本学会の使命の一つには、高等教育における教員の教育力の向上を図るための研究を行なうことにあるだろうか。このコーナーは、会員の皆さんから「私は・私たちは・本学では、このような教育を行なっています。こんな資料を使っています。」という情報を提供いただき、意見交換をし、私たちに求められている「教育力」を高めていくことをめざします。ぜひ、ご意見をお寄せ下さい。

今号では、そのプロローグとして、高等教育の場が社会の要請に即して対応を迫られていることや、学生の現実に即して検討していかなければならないと考えられることを、具体的な教材・テキストを紹介し

ながら、個人的な見解を述べさせていただく。このプロローグが会員の皆さんの「投稿」へのハードルを低くするものになることを期してお届けする。

今や常識となった「社会人基礎力」というキー概念。

しかしながら、私たち福祉系の教員は、自らの教授領域が「専門科目」であることでこの「社会人基礎力」の修得のためのノウハウを蓄積してきたとは言いがたい現実があるのではないだろうか。そこで紹介したいのが、右の写真にある『社会人基礎力育成の手引き』である。

同書においては平成19年度から3年間にわたり経済産業省によるモデルプログラム開発事業に関わった全国19大学の取り組みが紹介されている。冒頭記事が誠に印象的である。「人類が誇る『意欲を持ち、考え、協働する力』こそが社会人基礎力」であると。



モデル校の具体的な取り組みも興味深い。例えば跡見学園女子大学マネジメント学部の取り組みは、「難度の異なる複数のプロジェクトに同時に関わらせ、成功体験を積ませることで自信を付け、実社会へ」送出すためのゼミナール活動を展開した経験が報告されている。「理論20対実践80」という構成は印象的だ。(全558頁)

そもそも大学教員は、Academic Profession といわれ、特別な専門職である、という確認からはじまる『大学教員準備講座』。大学教員とは、①高度に体系化された専門的な知識や技能に基づいて活動する、

②公共の利益を第一義的に重視する、③活動を進める上で一定の裁量を与えられ、そのために自己統制が

求められるという。福祉系教員にあてはめるとどうであろうか。ともすると②や③の後半を忘れがちかもしれない。エッセイ・日記調で書かれていて、他人事のように読み進められながら、ふと気づくことがいくつもある。そんな読み物になっているのが『成長するティップス先生』である。学生支援も留学生支援もシラバスづくりもさらりと書き流されていておもしろかった。

本学会川廷会長が編者代表を務める『プレステップ基礎ゼミ』は、「大学への入学おめでとうございます。」からはじまる。本書での学びの目標は①生涯学び続けるためのステップを身に付けること、②学びを社会的活動に結び付ける方法を学ぶことと簡潔である。

1回の授業で読み進める分量もさほど多くなく、丁寧なステップが刻まれている。各ページに著名人の名言が刻まれ、それを読みたくてページを手繰ることもありえよう。そして、ワークシートがウェブサイトで公開されているのも活用しやすい。手軽な全141頁も魅力。



ここまでしなければならぬ現実があるのかと驚いたのが、左の二冊。まさにトレーニングのための日本語ワークブックであり、いわば「ドリル」になっている。確かに本学の学生であれば、ここからかもしれないと思い直し、手元においている。

少し古くなるが、アカデミック・スキルといえば、レポート・論文・プレゼンだった頃のノウハウ本。





レポートと論文の違いについても解説されているが、福祉系の学生に通じるのだろうか。逆に実践を論文にしていこうという福祉系の論文はいかにして書かせることができるのだろうか。『アカデミック・スキルズ』の中身は、クリティカル・シンキング、KJ法、ディベート、ディスカッションに及ぶ。さて、社会福祉士に求められる「社会福祉援助技術演習Ⅰ」との違いはどこに？つまり、専門的科目と言いつつ、コミュニケーション力等誰にでも必要な基礎力の養成に終始してしまっていないだろうか。



新入生援助集（フレッシュマンおたすけ集）と副題が付された『知のツールボックス』。700円という値段が魅力。要するに授業を聞き、ノートを作り、レポートを書くためのノウハウ本だが、一つひとつの作業に「名づけ」がなされており、共通言語の創出をめざしている。読みながら付箋を付していくのだが、詳論でありながら意外に付箋の数が多かった。

『大学生学びのハンドブック』は、大学教員の板書の「癖」を解説しており、板書とノートの作り方の違いを解説。板書を構造的にチャートのように書いていく自分の「癖」は、上から下へ順番にノートを書き写し、作っていく学生たちには、理解が難しいのかもしれないと思返した。



さて、本学では中国人留学生を受入れていることもあり、基礎ゼミⅡ（2年生）で、『大学生と留学生のための論文ワークブック』を活用している。日本語文法をきちんと理解していないと解説しづらいと感じる部分もある。それ以上に、日本語能力の乏しいまま入学してくる留学生と如何に向き合うのかに苦慮している現実がある。また、30分しか座ってられない学生に戸惑うところから、2011年は始まった。そして、個別に補習授業を週に2コマ行ないながら、年度が終わろうとしている。毎回、数ページしか進まない要約に、要約の「主語・述語」「副詞・助詞」を真っ赤になるほど修正しながら、職業人として働き始めた頃、行政用語や言い回しに慣れず、決裁がいつまでももらえない自分を思い出している。「赤字が入ったレポート用紙を大切にしろ。それが君の学びの証だ。」と激励しつつ。

2012年度本学は、1年生の基礎ゼミを通年2コマに拡大する。教員の間での反対意見を学科長・学部長等が押し切る形で導入される。そのテキストがこちら『知へのステップ』。本学学生には少々、分量が多いようにも思う。しかし、ここまで紹介してきたようなワークブックや「ドリル」も駆使しながら、学びの到達点を確保していくことになるだろう。CDに収録された14～19章も魅力的だ。時間は、「1年30コマ×2」もある。

私たちは研究者であり実践者であり、かつ教育者として、4年間を苦しみ・退学していく学生を放置しては同専門職としての倫理に関わるのではないかと考える。冒頭で紹介した「人類が誇る『意欲を持ち、考え、協働する力』」を身に付け、「できた」あるいは「できるんだ」という思いを胸に刻み、自己肯定観の低い学生たちの、自己を「修復・回復」させ、社会人として送り出してやりたいと思う。さて、それを実践できる力量が私にはあるのだろうか。



次号から「私の福祉教育」のコーナーを復活させます。会員のみなさんが執筆されたテキスト・参考書・学術書やその使用方法、PRを記事にして事務局までお寄せ下さい。その際、できましたら、ご紹介する書籍等を一冊、事務局までご寄贈いただけると幸いです。どうぞ、よろしくお願いいたします。(J. J.)

## 8. 『日本社会福祉教育学会誌』第6号の発刊並びに第7号への投稿募集！

編集委員長 杉山克己

### 1. 随時受け付けます

投稿規程上の投稿締切は「毎年3月末日」となっていますが、1年に一度の締切ですから、実質的にはいつでも受け付けます。是非、積極的に投稿をお願いいたします。

### 2. 年2回の発行を目指しています

これも学会誌規定では「原則として1年に1回発行するものとする」となっていますが、現在、年2回(夏季・冬季)の定期発行を目指しています。

### 3. 実践報告、調査報告などの投稿も積極的にご検討ください

学会誌規定には「社会福祉教育に関する論文・実践報告・資料解題・調査報告・海外社会福祉教育研究・書評・学会情報など」となっています。これまでのところ、投稿は「論文」でのもものが大半となっています。しかし、「教育」学会ですから、実践報告や調査報告などがより多くあっても良いのではないかと考えています。より具体的な教育実践の改革に繋げるためにも、そして、自らの教育実践を振り返る機会とするためにも、テーマを定めて報告することは重要だと考えます。是非、ご検討ください。

### 4. 査読は論文・報告をブラッシュアップしてもらえる機会

投稿には査読が伴います。学会誌ですから、特に「論文」の際には厳しい意見が見つかることもあるのは事実です。しかしながら、その「論文」の場合も含めて、査読者には「論文投稿者宛てに評価・要修正箇所などを具体的に(且つ多少教育的に)ご指摘ください」とお願いしております。この査読者とのやり取りを通じて、足りないところや伝わらないところなどが修正され、投稿いただいた「論文」や「報告」は確実にブラッシュアップしていきます。つまり、無料で論文指導をしてもらえるようなものです。是非、この機会を有効に使って頂ければと考えています。たとえ、不本意な結果となっても、必ず、次回につながるものが残るはずですよ。

その他、学会誌投稿に関連した事柄で、ご意見・ご質問等ありましたら下の学会事務局、もしくは編集委員長へご連絡下さい。なお、編集委員長は職場のアドレスになっています。今後、編集委員会独自アドレスの設定についても検討していきます。

学会事務局：[jsswe.bu@gmail.com](mailto:jsswe.bu@gmail.com)

編集委員長：[katsumi\\_sugiyama@ym.auhw.ac.jp](mailto:katsumi_sugiyama@ym.auhw.ac.jp)

## 9. 編集後記

NL12号を会員の皆様にお届けします。今号は3月に開催される春の研究集会へのお誘い、学会活動あるいは論文投稿、著書紹介、研究・教職へのお誘いと、「お誘い」をテーマにしました。

そしてもう一つ、今後本学会において活発化するであろう地域ブロック活動へのお誘いです。前号でお知らせしましたとおり、総会において地域担当理事が決定しています。社会福祉教育あるいはソーシャルワーク教育の社会的意義・役割を共有する仲間と「地元でネット！」を構築しませんか。

地域担当：北海道(志水幸)、東北(杉山克己)、関東甲信越(横山豊治、保正友子、川上富雄)、中部(宮嶋淳)、近畿(小山隆)、中四国(長崎和則)、九州(高橋信行)

(編集委員：J. J.)